





二編下の巻 斯に海彦

おちよよおまゝかゝるの之へ今後彦彦と名を
 去来よあめく菊野枝と更よ人々絶もあつ
 上と英け且つ驚くのもまほ後彦彦を掛けし
 浪彦彦目も物身せらと声の下よりあふの者ども
 ワツトおめつて一日お打て揚り一せ法の
 春初結彦彦のあふみ
 花柳の二海彦と二あよ
 とあのと標彦彦とつとけ
 まうひ方へワツトと
 角力ども争ふ力へあま
 一の甲斐又あふた女の是相もまぐりし
 ちとあふさせ下とまゝあちよと後彦彦が
 海彦彦

おちよよおまゝかゝるの之へ今後彦彦と名を
 去来よあめく菊野枝と更よ人々絶もあつ
 上と英け且つ驚くのもまほ後彦彦を掛けし
 浪彦彦目も物身せらと声の下よりあふの者ども
 ワツトおめつて一日お打て揚り一せ法の
 春初結彦彦のあふみ
 花柳の二海彦と二あよ
 とあのと標彦彦とつとけ
 まうひ方へワツトと
 角力ども争ふ力へあま
 一の甲斐又あふた女の是相もまぐりし
 ちとあふさせ下とまゝあちよと後彦彦が
 海彦彦



あふみの今まき様から
 春彦彦の戸曉彦彦
 海彦彦

綾重二下



11

11

つぎに尋ねたきりよと老助は答へ
 けり老助はきりよと老助は答へ
 と尋ねたるはきりよと老助は答へ
 多の目撃をなせりやうかきりよ
 給は流し舟をひき送中せ
 捕縛せ及途へ引んと
 二人密に相残るし彼の
 杖渡り物とつけ途中
 みだりて名ふかひ捕
 縛んとまゝたるふ
 彼方も捕縛の難
 一が程の操合ふ
 馬を用意をきりよ



冠りたる
 武士は
 て中身を
 喰を倒る
 知らずと
 状箱推して中
 みる紙の封
 切て月ふ
 ま色は馬ッ
 と眺めて
 其の
 一人
 の世の

つぎに尋ねたきりよと老助は答へ
 けり老助はきりよと老助は答へ
 と尋ねたるはきりよと老助は答へ
 多の目撃をなせりやうかきりよ
 給は流し舟をひき送中せ
 捕縛せ及途へ引んと
 二人密に相残るし彼の
 杖渡り物とつけ途中
 みだりて名ふかひ捕
 縛んとまゝたるふ
 彼方も捕縛の難
 一が程の操合ふ
 馬を用意をきりよ



たつた
 今宵
 初月の夜
 働らた
 昔の
 花柳の
 とのな
 紙
 種
 種
 種
 種

つぎ 幸を帯ぐ仔細をねづねる 武王を方月外学教文の宿小放り
まぐら 勢のこそ幸を帯ぐねてた地を 我身が病め一者やうをわねを
附んと切替ふその此たつたの心をあはれ法流 肩の上うらみの此の此の厭わねど
の用おなをて一後幸を帯ぐ帯がちを 一まひなまこののりまひなま止めま
業とほま者多とらまひなまを 一まひなまこののりまひなま止めま
ほはえれま幸を帯ぐの心をあはれ 一まひなまこののりまひなま止めま
「ゆねまよひ仔細を帯ぐ我を打んと 一まひなまこののりまひなま止めま
あまのぞまままのま村ままま 一まひなまこののりまひなま止めま
切込ままのの内所先使く切り 一まひなまこののりまひなま止めま
ままのまままのままままま 一まひなまこののりまひなま止めま
又切付んとままままま 一まひなまこののりまひなま止めま
後ままのまままのままままま 一まひなまこののりまひなま止めま
一編下の巻まま

銅版開化玉編 全

漆時延房編輯 初編ヨリ
近世紀聞 十編迄出版
鮮齋水滸再 以下迄を発売

開化女用文章 全

芳川俊雄編 小島三郎再
夜嵐阿鬼奴花仇夢 五編
岡本勲造作 大尾

義烈回天百首 全

守川周重再
青田橋傳 夜叉譚 八編
大尾

金花七變化

香賀文作 三編
國貞再 出版
濡衣女鳴神 十編
大尾

金地本問屋

出板御届明治十五年七月十五日
金松堂 出版人 辻岡文助

伊東三郎 編輯人 伊東三郎

